

不動産学の魅力

明海大学 不動産学部

第65回



日景 蘭
不動産学部
2年

不動産学部では2年生から設計演習がスタートする。学年が上がるにつれ、街並みや共有地マネジメントを意識した約50戸の住宅地計画やホテル不動産の開発企画書作成を行うが、その最初の一

歩として、作図の基礎的技能を身につけている。

設計の授業で実際に図面を描いていると、普段の生活で見落としていたことに気づくことがある。その1つがドアの開き方だ。例えば、大勢が集まるイベントホールのドアは、緊急時に速やかに外へ出られるように会場内から外に開く。また、多機能トイレのドアは車いすやベビーカーの方も入りやすい幅広なスライドが主流になる。このように、

ドア、どーあく？

ドアを新しい視点で考える

生活や人の行動とドアの開閉は身近であり、不動産を計画・設計する上での工夫が詰まっている。それでも、トイレの個室のドアに

イレはどうだろうか。ほとんどのドアは内開きだ。外開きになると人との接触する可能性があるため、内開きが採用されていると納得した。

しかし、これでは、理想と乖離しており、緊急時に危険だ。また、大荷物のおきは入るのが困難なトイレもあり、苦勞した経験もある。一方で、多機能トイレのようにスライ

ド式のドアにした場合、ドアのとりつく向

きや収納スペースに課題が生じる。

そこで、人に当たるリスクを軽減し、狭いスペースで実現できる蛇腹式ドアを考えた。部屋を仕切る場合などに利用されているこのドアを、

トイレに利用できないだろうか。ここで問題の1つとしてあげられるのが防音性だ。蛇腹式は折り畳めるようにドア自体に使用される素材が軽

く、厚みが薄いため、現在利用されているドアよりも防音性を維持するのが難しい。この提案は建物所有者や製造業者に管理・衛生面や開発において革新が必要だが、利用者に新しい刺激を与え、利便性の向上が期待できる。

このように、身の回りのものを既存の概念から考え直すことで、授業で得た知識を広げることができた。これからも身近なものに着目して楽しみながら学びを深めていきたい。

【教員コメント】

ドア（建具）は、建物に付加して一体となり、その不動産の使い勝手を印象づける。図面を引くときにそうしたことが意識され、一般化されている概念の理由を探り、新たな提案に求められる条件が、継続的な利用や製造等を踏まえて整理されている。

（前島彩子）